

第26回「みんなのくらしと放射線展」報告

第26回「みんなのくらしと放射線展」が、扇町キッズパーク・1階アトリウムにて、8月13日(木)から16日(日)まで開催された。旧大阪府立放射線中央研究所の有志によって始められた「みんなのくらしと放射線展」は、その後大阪府立大学に事務局を置く「みんなのくらしと放射線」知識普及実行委員会(関係9団体で構成)の主催となり、昨年までに累計45万人を超える来場者を数える我が国有数のイベントに発展した。

今年は天候に恵まれ、また高速料金の引き下げなどにより、外へ遊びに出かける人が増えて来場者が減るのではないかと危惧されたが、ほぼ昨年通りの1万5千人を越える来場者があった。今年度は「私たちの生活に欠かせない放射線を見つけよう」と題して、身の回りで普通に使用されていたり見かける放射線利用で作られた様々なものをとりあげ、放射線がごく身近なものであることを体感してもらうことを目指した。

初日には午前10時よりメインステージにおいて関係者多数の出席のもとに開会式が挙行された。実行委員長である奥田修一教授(大阪府立大学放射線科学研究センター長)の開会の挨拶に続いて関西原子力懇談会会長でオンサ会長でもある八木誠関西電力副社長、奥野武俊大阪府立大学学長からの祝辞、来賓の紹介、テープカットが行われた。今年度のテープカットには奥田教授、八木会長、奥野学長に加えて、「わくわくサイエンスショー」に出演する二人の子役が加わり、なごやかな雰囲気を醸し出した。

例年、その年のメインテーマに即した大きなシンボルマークを会場入口付近の目立つ場所に設けていたが、今年は主題が身の回りの放射線を見つけるという身近なテーマであり、特に目をひく大きな工作物を置かなかつたので、東側の正面入口から入場すると会場全般がすっきりと見通しがきいた反面、インパクト不足の印象を受けた。新たな試みとして、受付ブースに続いて「放射線展ライブシアター」と銘うったライブスタジオを模したブースを設置し、女性キャスト

ーが身の回りにある様々な放射線を利用した製品などを短時間で紹介して展示の導入とするパフォーマンスを行った。さらに当日の会場での見所を各部門の担当者がPRを行い、来場者を会場内にスムーズに導入するようにした。目論みとしては面白い企画であったが、来場者の動線に近く足を止めてくれる人はそれ程多くなかった印象を受けた。会場内では放射線利用を大きく工業、農業、医療の三つのグループに分けて、展示ブースを設置した。従前よりもパネルを減らし、来場者が実際の製品を目で見える形で展示することにより、放射線利用を理解しやすいような努力がみられた。農業のブースでは芽止めジャガイモに加えて、放射線育種によって生みだされた多くの花が展示され来場者の関心を集めていた。対照的に工業のブースでは展示物の種類は多いものの華やかさに欠ける印象は否めなかった。このことは来場者のアンケートの答えにも如実に表れていたように思う。ステージではわくわくサイエンスショー「ルシアとにじの国の魔女」、「おもしろ実験ショー」、「放射線ミニセミナー」が例年通り行われた。「オズの魔法使い」を翻案とした「ルシアとにじの国の魔女」では可視光であるにじの向こう側の色のない世界の魔女という何となく放射線の世界を髣髴させる設定で、随所に放射線利用に関するクイズをおりませながらショーが進行したが、少々こじつけた箇所もあったものの、会期の後半にはスタッフの飛び入り出演もあり、観客は楽しんでいただようである。「放射線ミニセミナー」では府大や放射線技師会の先生方が講師となり、子供向けに放射線に関わる様々なテーマを紹介しているが、常日頃は大学生や市民の方々など成年と接触しておられる方々だけに、話し方にはご苦労されておられた。「おもしろ実験ショー」ではその内容には必ずしも放射線とは直接関係の無いテーマも含まれているが、演者の講師の方々ベテランだけに大人も思わず理科の実験の面白さに引き込まれてしまう。例年、来場者に人気の「親子工作教室」が今回は「霧箱」工作だけであったために、失望のコメントがいくつか寄せら

れたので、来年度は復活させるべきかもしれない。同じく根強い人気のあった「骨密度測定」が運営上の理由で中止となったが、放射線技師会が病室のベッド脇でも撮影の可能な可搬式 X 線検査装置を展示され、子供たちに人気のあるキャラクターのポケモンが描かれていたこともあって注目を浴びていた。会場を巡りながら与えられた問題を解く体験ラリーでは、それぞれのラリーポイントにおいて答えを自分たちで導き出すような出題が工夫されていた。さらに、全問答えた参加者には「恐竜の卵発掘ゲーム」に挑戦する権利を与え、掘り出した卵を X 線透視装置にかけて、その殻の中に隠された文字によって様々な参加賞が貰えるという新たなイベントを開催した。大変人気があって発掘ゲームの場所がいつも混み合い、順番待ちが多くて担当のスタッフは卵の補給に大忙しであったので、今後の検討課題であろう。また、会期中に関西原子力懇談会が主催した放射線教育セミナーは、平成 23 年度から施行される中学校理科の新学習指導要領における「放射線教育」をとりあげたこともあり、例年以上に現職の先生方や各分野の OB の方々の出席があり、時間が足らなくなるくらい盛況であった。長年にわたって中学校の理科教諭として生徒たちに興味を持たせて授業を受けさせる工夫をしてこられた小森栄治先生の実習を交えながらの講演を大変楽し

く聴かせてもらった。また、その後の討論では現場の先生方の率直な意見を聞くことが出来て非常に有意義であった。

最終日には関西の電力のほぼ半分を供給している福井県で音楽活動を行っている「楽衆玄達」のライブパフォーマンスがあり、二人の歌姫の美しい歌声が会場内に響きわたった。予定の時間をかなりオーバーしたが来場者には大変好評だったようだ。

総括の会議では、今年度の反省点が話し合われ、次年度以降の開催方針について議論された。特にお盆開催の是非については、必ずしも子供たちを呼び込む状況ではなくなったとの分析から来年度は時期をずらすことも検討課題となった。また、内容がやや平易に流れすぎているのではないかとの批判もあるが、展示会は子供たちを対象とするイベントとして割り切るべきでないかとの意見もあり、レベルをあげた催しとしてシンポジウムなどを同一会場で行ってはどうかなどの意見が出された。会場についても協力態勢を組んできた「サイエンスサテライト」が来年は廃止されるという情報もあり、来年度の計画については早めのプランニングが必要のようである。

(大嶋記)



写真 第 26 回みんなのくらしと放射線展・開会式テープカット風景(右から二人目 八木 誠 会長)